

後編

Wimmera Field Days
5 6, 7 MARCH 2013

ヒール宮井の オーストラリア 農業紀行

本誌コラムでおなじみのヒール・ミヤイこと宮井能雅氏ら一行は今年の3月初旬にオーストラリアを訪ねた。2,100kmに及ぶ長旅のレポートの後半は、同国ヴィクトリア州で開催された農業展示会（ファームショー）の様相を紹介する。

写真・文 宮井能雅



3



2



1



5



4

1 子どもと一緒にファーム・ショー、きっと大きくなったらオージー・ドン百姓になるのだろう。2 ジョンディアのコンバインは620馬力だ。3 ベルト式のコンバイン・ヘッダー。右側が刈取部。4 私が使っているジョンディアの自走式スプレーヤーだ。文句あるか？ 5 世界に名だたるキャット・チャレンジャーのフルクローラトラクタは日本では販売されないようだ。

オーストラリア・ヴィクトリア州のウイメラ・フィールド・デー（ファーム・ショー）に初めて訪れたのは1979年だから34年ぶりの訪問になる。この国の一人当たりの経営面積は米国やカナダよりもはるかに大きい。使用される農機具は米国製とヨーロッパ製の混在状態だ。たとえばイセキでも販売されているアマゾーネの肥料散布機が展示されていたが、米国では見たこともないし、カナダでも限定的な使用状況である。

今回訪れた研修当時のホスト・ファミリーのジョン・ハミルトン氏が使用する自走スプレーヤーは数年前にわざわざイギリスまで見に行き購入した5000ℓ仕様である。なぜジョンディアやCASEなどの大手販売店が扱っている米国製自走スプレーヤーを選ばないで、オーストラリアでの部品供給をこれから始めるメーカーに決めたのか。不思議に思ったので質問してみたが、当地のディーラーがヨーロッパ製を強く勧めたらしい。その背景には近年ジョンディアをはじめとする米国系販売店がそれぞれの米国本社からの指示で行なった統廃合がある。これには生産者の反発もあり、親欧主義になびいている感じがした。

ではこの話を理解できる日本国内の生産者はどれくらい、いるのだろう



8



7



6



11



10



9



15



12



14



13

6 ジョンディアの播種機だ、後ろに種の入ったカート(写真7)をけん引する。7 写真6の播種機用の種用のカート。8 フォード5000だろうか、実は私も使っているトラクタだ。三点リンクの油圧は500kgしか揚げられないが。9 デカイレーキだ。10 6m仕様のジョンディアの肥料、種の小型播種機。オーストラリアでは“コンバイン”と呼ぶ。11 マッセー・ファーガソンのコンバイン？ まだ売っていたんだ……。12 研修当時のホスト・ファミリーのジョン・ハミルトン氏のブドウ畑。13 14 ワイン用のブドウの収穫作業は夜11時からスタート。カンガルーはブドウを食べるが、小型のワラビーはブドウに興味がないようだ。15 ブドウ用の収穫機はニューホランドのトラクタをベースになっている。

か？ 海外で作られて日本で販売される農業機械は明らかに国産に比べて価格差がある。それは販売店等が在庫を抱えるシステムを維持しているからだ。あの店に在庫がなかったら、在庫のある違う色の似たようなものでも構わないとする考えが生産者の利益になるのか考え直す必要がある。米国のように在庫があるということ、その経費や金利を生産者が支払っているのと同じ意味になる。TPP参加後に分かっていくのだろう。

ファーム・ショー会場を歩いていると「ニイハオ」「アンニョンハセヨ」と聞き覚えのある言葉で挨拶してくる。今回のツアー参加者のある人が「ジャパニーズだ！」と何度か言い返すと、必ず「コンニチワ！」と返してくる。この国の学校での日本語普及率は世界一の水準なのだから、簡単なあいさつは、お茶の子さいさいなのだろう。それよりも農機具の世界でも中国製やインド製が目につく。彼らがこの10年で飛躍的に販路を求める姿がこの国でも実感できた。もちろんイセキ、クボタ、日野トラック、いすゞなどの日本製は完璧に信頼ブランドである。それに比べて、日本の農産物の品質、収量が世界基準とかけ離れていることを日本人が知らないのは残念である。